

氏名	XIE, YINPING
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第217号
学位授与年月日	2020年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	芥川龍之介考 東洋的アイデンティティの問題を中心に (A Study of Akutagawa Ryūnosuke: With a Focus on the Problem of Eastern Identity)
論文審査委員	主査 教授 ツベタナ I. クリステワ 副査 教授 片山 倫太郎(鶴見大学) 副査 教授 ロバート エスキルドセン 副査 教授 佐野 好 則

論文内容の要旨

Xie, Yinping (謝銀萍)氏の博士本論文は、芥川龍之介の作品を、「東と西」という対比の枠内で、西洋文化論、日本文化論、芸術論と中国観という四つの視点から分析し、東洋的アイデンティティ、すなわち明治以降の急速な近代化の波にとらわれた日本と中国を含む東洋文化のあり方に対する芥川の思索を考察した上、その思索がいかにして芥川の文学行為に反映されているかについて論じたものである。

本論文(250総頁数)は、序章、五つの章、終章と参考文献から成り立っている。序章では、「東洋的アイデンティティ」という論文の基本概念について紹介し、R.タゴールによる「日本文化論」を踏まえることによって、「東洋」の範囲を広げた一方、「東と西」の問題は、地理的な意味というよりも、伝統的な文化と近代化という意味において取り扱われていることを説明している。

第一章(「芥川とその時代」)では、大正文化の社会的・政治的背景について取り上げ、近代文化と文学の諸相についてまとめた上、同時代の中国社会と文化にも目を向けて、両国の文化的事情の比較を試み、芥川を始め日本文学の中国語訳を紹介し、当時の中国の知識人による芥川の捉え方について考察している。

第二章(「芥川の西洋文化論」)は、キリスト教文化と産業化社会といった二つの大きなテーマを中心に、日本の急速な西洋化に対する芥川の考えを考察したものである。

夏目漱石、森鷗外、永井荷風などとは違って、西洋を訪れたことがない芥川にとっては、それが架空の世界だったからだろうか、常に危機感や懸念を覚えていた。「煙草と悪魔」の分析を通して、西洋文化に対する芥川の両義的な態度を考察し、こうした両義性を「河童」においても追究している一方、産業化社会に対する芥川の不安と批判には、西洋の知識人の態度との類似点があることを示している。

第三章(「芥川の日本文化論」)では、日本の伝統的な文化に関する芥川の捉え方について、空間論と小物への着目という視点から考察し、「手巾」の分析を通して「日本的とは」何を意味しているかについて追究し、「庭」の分析を通して日本的な要素をいかに守るべきかについての芥川の見地を明示している。最後には、芥川の「日本文化論」と見なされる「神神の微笑」を取り上げ、芥川が萬の神の一人である老人を通じて唱えている日本文化の「作り直す力」について論じている。

第四章(「芥川の芸術論」)では、古代と現代、芸術と現実という二つの大きなテーマを中心に、比較文化的アプローチを取り入れながら、芥川の芸術論を紹介し、解釈している。中国の古典『枕中記』に基づく「黄粱夢」と、平安時代の説話を基にした「六の宮の姫君」の分析を通して芥川の歴史小説の特徴について論じ、「沼地」、「戯作三昧」、「地獄変」の考察を通して芥川が理想とした芸術家のあり方を検討し、「生と死」の問題と関連づけている。

第五章(「芥川と中国」)では、東洋的アイデンティティの問題をめぐる議論の締めくくりとして、芥川にとっての中国の意義について考察している。従来の研究においてあまり着目されてこなかった「南京」に焦点を合わせ、「南京の基督」と「江南遊記」における南京の描写を取り上げ、想像される南京像と現実の南京像を区別した。さらに南京像を「上海遊記」に見る上海像と比較し、芥川が中国に失望した理由を、タゴールが日本文化について論じたことと関連づけた。つまり、その理由は、近代化により喪失されていく東洋の文化精神という問題にあると指摘した。

終章では、芥川の子作と思想を特徴づけている両義性を通して、彼の東洋的アイデンティティについてまとめている。西洋文学の恩恵を受けて文学の道を歩み始めた芥川は、自分の内面に根ざしている東洋文化的アイデンティティを意識し、当時理想化されていた西洋文化と近代化と距離をとって、その特徴を冷静に把握しようとしていた。さらに、近代化にさらされた日本の伝統的文化のあるべき姿について考察し、その文化を伝達していく重要性について強調し、西洋文化との調和について論じていたが、その問題は、今もなお意味も切実性も失っていないのではないか、と結論づけられている。

論文審査結果の要旨

本博士論文の審査は、ICU の教授三人と鶴見大学片山倫太郎教授という四人の審査員から、ICU の規則の従って、中間報告と審査と最終審査という二つに加えて、最終草稿審査という三つの段階で行われてきた。最終審査は 2020 年 2 月 7 日の 13:15 からおよそ二時間に渡って、ICU の ERB-247 会議室で行われてきた。審査公開のため、四人の大学院生も同席していた。

2019 年 10 月 25 日に行われた最終草稿の審査の段階で、論文の構造や内容、議論の流れなどが高く評価された一方、改善すべき点(「河童」や「地獄変」などの分析、スタイル)についての細かい指示があったが、最終論文は、それらの指示を丁寧に反映していたので、論文のレベルがいっそう高まり、学問的貢献がより明確に現れてきた、と審査員の意見が一致したのである。

片山倫太郎教授は、取り上げられた作品とテーマの分析は不足なく丁寧にされているので、論文の印象はとても良いと評価し、参考文献の紹介も日本語のレベルもとても良くなったことを指摘した。さらに、分析の対象になっている作品には、普段あまり取り上げられていないものも含まれていることに着目し、各章のオリジナリティと貢献について論じた。中でも特に高く評価した点は、次の通りである。

- 1) 「芥川の西洋文化論」の考察を、キリスト教文化と産業化社会という二つの焦点に対応して行われていて、「両義性」というその特徴が浮き彫りされていること;
- 2) 「庭」を始め、日本文化論の考察は、とても新鮮で、面白い指示があること;
- 3) 芸術論の考察、とりわけ「地獄変」の考察は、「死」を中心とした従来の研究とは違って、「生」の視点から行われ、「生きる」ことの意味を追究するアプローチは、驚くほど新鮮で、しかも説得力が高いこと;
- 4) 謝氏の故郷でもある南京の描写の分析は、芥川の「中国観」の両義性をよく現していて、東洋的アイデンティティ考察のまとめになっていることである。

R. エスキルドセン教授は、論文全体、特に四章と五章はオリジナリティのレベルが高いと評価した上、歴史的な認識の必要性と重要性について指摘した。こうした視点から、第一章で行われた当時の中国の知識人との比較、また中国における芥川の受容についての考察を高く評価した一方、論文の中で取り上げられている「西洋」と「東洋」の定義について一層明確に示すことを勧めた。

佐野好則教授は、論文のメッセージが明確であり、よく伝わってくると評価した。さらに、両義性の分析、中国における芥川の受容についての考察の意味を強調した。

続けて、「生と死」の分析の面白さを踏まえて、芥川自身の自殺について質問した。最後に、芥川の歴史小説における古典の取り扱いに関して、ヨーロッパの文学におけるギリシャ神話の再解釈の詳しい例を紹介し、比較研究さらなる可能性について指摘した。

謝氏は、芥川の自殺について、有島武郎の自殺などとの比較を通して論じて、論文ではその問題について詳しく取り上げていない理由について説明した。

最後に、ツベタナ・クリステワ教授は、謝氏の研究者としての成長ぶりを踏まえ、博士論文のレベルの高さを強調した。研究の最初の段階で焦点も目的もはっきりしていなかったのに比べて、現在は芥川を完全に「自分のもの」にして、数多くの研究者のなか、「自分の声」を持つことに至ったと評価した。他の三人の審査員が指摘した論文のメリットを確認し、「河童」の分析と芸術論の考察を褒めた一方、さらなる構造改善などについての細かいアドバイスをした。

謝銀萍氏は、すべてのコメントやアドバイスに対して感謝を表し、製本前にもできるだけの細かい訂正を試みる一方、将来の研究の課題とすると述べた。

こうして博士論文の口述試験は、既述したように2020年1月7日(金)の13:15から15:00まで教育研究棟247会議室で行われた。この口述試験の後、引き続き審査委員会を行った。審査員は、中国と日本を始め「東洋的アイデンティティ」への眼差し、明確な問題提起、新鮮でオリジナリティのある作品解釈と分析など、論文の学問的貢献を高く評価し、博士論文審査に合格と判断した。